

一 次のAとBの文章は、饗庭孝男の著作『石と光の思想—ヨーロッパで考えたこと—』からの抜粋である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

A

ヨーロッパで私をはじめて感じたことは、人間が石造りの建物に住んでいるという事実から受ける奇妙な嘔吐感、または眩暈感であった。

その時、私があらためて自覚した自分の存在とは、日本で木という有機物でつくられた建物と、目に見えない連関の仕方(1)で調和をもって生きていた有機的存在であるということだった。木は自然の変化に微妙に感応し、即応しながらわれわれとかかりあっている。そのあり方は、一つの共通の要素に働きかける親和力をとおしても云うべきものである。自然から切りとられた木でさえも、家という構造の中では、同じく自然的で有機的な存在であるわれわれと密接に結びついている。

だが、石は何という意味を持っているのであろうか。石が人間に及ぼす働きは二重であり、両極的であると私は考える。つまり石は自然の脅威に対しては堅固に人間を守るが、同時に石造りの建物の内部では明確に人間を拒否しているということである。その非情性は、有機的存在(人間)を、ただ在ること、自体において即物的に否定しようとする沈黙(あ)の□を持つているといってよい。石によりかかった場合、その冷たさということ、われわれが熱を奪われているという感触においてである。もし、人が石を抒情的に歌うこともなく、石を馴れしんだ概念で呼ぶこともやめ、その「石」にかこまれて人間が生きているという事実を考えてみた時、石をはじめてその(い)□本質をおのずから示すだろう。こう考える時、私はいつも、カミュが云った「一つの石がどんな点で異質であり、われわれにとつて還元不可能なものか、自然が、一つの風景が、どれだけの強さでわれわれを否定しようか」あらゆる美の内奥には何かしらある非人間的なものが隠されている」という言葉を思い出すのである。(A)私(ア)は石が人間を守るといふ働きよりも、それを拒否するといふ働きに注目せざるをえなくなった。この点に関して、私が持った一つの印象を忘れることができない。

一九六七年の夏、私は南仏のピレネー山脈の麓の高地にあるポーという町で、夏の一ヶ月半をすごした。この町の歴史は古い。だが、とりわけ十九世紀の^{★注2}の時期にイギリス人たちがこの風土の快適さに注目して開発して以来、特に名前が知られるようになった。アルフレッド・ヴィニイがここで若く美しい英国の少女と知り合つて結ばれたこと、^{★注3}ラマルチーヌが、この世における海辺の最も美しいナポリと比較して、地上の最も美しい土地として讃えたことも、また、^{★注4}フランス・ジヤムが、冬さえも風土は清澄性を持つていと歌つたことも、また^(え)事実である。

透明な夏の光の下で、それは生活の匂いの殆んど感じられない抽象的にまで美しい町であつた。私はこの町でひらかれていた夏のポルドー大学とトゥルーズ大学の講義に出ていた。大学に通う私の道筋には、^(B)私の心をいつも奇妙に惹きつける一軒の建物があつた。その屋根裏部屋の窓から、ほとんどいつも黒衣の老婆が、じつとすわつたまま通つてゆく私を凝視しているのである。目も眩むような南欧の光の中で、その窓は、逆にその暗さにおいて際立つていた。そしてまた、おそろしいまでに空虚に、しかも黒ずんでみえる老婆の眼窩は、^(がんか)さながら大きな窓に対応した小さな窓のように私に映じた。つまり二つの黒い窓が私を見下しているのであつた。そして不思議なことに、ヨーロッパの殆んど建物の屋根裏部屋の窓わくの恰好が、墓地にみられる納骨堂の形式といちじるしく似ていたのである。したがつて私のヴィジョンにおいて老婆の姿は、生きている死者のように映じていた。外には白くやけたぎり、垂直におちる夏の光と緑の葉のそよぎが目にも痛いまでにさわぎたち、通つてゆく私のまわりには肌の匂うようなフランスの美しい少女や、英国、あるいは遠い北欧から来た少女たちが行ききしていた。だが、私の心はその老婆にうばわれていた。

B

私は、その年のクリスマスの休暇を利用してスペインへ旅をした。そしてバルセロナにある古い十三世紀の壮大なゴシックの聖堂に足をふみ入れた時のことを私は思い出す。その瞬間、^{★注5}バッハの『トッカーターとフーガ』が重厚な深い美しい響きをともなつて鳴りわたつたのである。私は魂の洗われる思いで内陣の椅子に腰を下した。ヨーロッパに来てはじめて、それまでな

じもうとしてなじめなかつたバツハが理解できた。もちろん、パリでも私は、しばしば「サン・ジェルマン・デ・プレ教会」や、「サン・シュルピス教会」、あるいはコンコルドに近い「オセール教会」でバツハを聴いた。だが、このバルセロナの寺院におけるバツハは、まさしく「垂直に立ち昇る祈り」のように石造りの巨大な天井に響いては消えてゆくのであった。

ところでフランスよりもカトリック信仰の厚いスペインの寺院がいつもそうであるように、一段と絶えまなくたきしめる香煙で黒ずんだ内部は、一瞬、光に馴染れた私の目から精神まで盲目にするような印象を与えたが、その暗さに馴れてゆくと、前の祭壇に近い一角に、黒々とした老人の群がみじんも動かずにいるのを見ることが出来た。彼らの多くもまた体が不自由であり、夫婦であるものはお互いによりかかり、孤独な者は杖に凭もたれて頭を垂れていた。この教会の建物の中にいる彼らの心には、モーリヤックがのべたような「目に見える教会」と「目に見えない教会」が既に一体となっているのであろうか。あるいは更に「たとえ津波がやって来て、殿堂も修道院も、宮殿も、一切の事業も破壊されるとも、実際には何ものも破壊されない」目に見えないキリスト教の世界のみを信じているのであろうか。

しかし、救いはこの^(お)石造りの教会の中の祈りにしかありえないのである。私は長い間、彼らとともに、香煙のために暗くなり、「神は光りである」という思想からつくられたステンドグラスまでも燦きらんでみえる、その体の底から冷えてくるような建物の内に座っていた。^(か)まで来ている彼らは、生は運命以上のものであるという考えをどれだけ信じうる力をもっているのであろうか。私はマドリッドのプラド美術館にある、フリーユゲルのあの戦慄すべき『死の勝利』のイメージをこの老人たちに重ね合せながら、私は既に死と永遠がまじり合っているようなその聖堂を出て、^(c)冬さえも光にみち、無辺際なまでに青い地中海にのぞむ港へとのがれたのである。

思えば木と馴れ合い、自然と調和している日本人にとっては、「死」は多く一つの自然の帰結に映じるのに反して、ヨーロッパにおける死の意識は、今のべたような私の印象をもとおしてみる時、一つの暴力とも力動的な作用ともなって人々の心に生きていたのである。そこではじめて「石」を媒介にして「生」が「死」と対話をはじめのだと私は思う。私がこの一文で書きたかったことは、その一点につきる。そしてヨーロッパの人間は、運命とは何かという執拗なまでの問いをくりかえして止まな

いのである。ヨーロッパの思想の原点はこの対話なくしては成り立たない。冒頭に私が⁽²⁾のべた一種の名状しがたい嘔吐感、眩暈感にともなう有機体としての存在の不安が形而上学的色彩を帯びてはじめて私の心にイメージを結んだのは、その事実を考えた時であった。

饗庭孝男『石と光の思想—ヨーロッパで考えたこと—』より

注1 カミュ…アルジェリアに生まれたフランスの作家(一九一三—一九六〇)。

注2 アルフレッド・ヴィニイ…アルフレッド・ド・ヴィニイ(一七九七—一八六三)。フランスの詩人、作家、劇作家。

注3 ラマルチーヌ…フランスの詩人、政治家(一七九〇—一八六九)。

注4 フランシス・ジャム…フランスの詩人、作家(一八六八—一九三八)。故郷ピレネーの自然を背景とした詩を多数残した。

注5 バッハ…ヨハン・セバスティアン・バッハ(一六八五—一七五〇)。ドイツの作曲家、オルガン奏者。

注6 モーリヤック…フランスのカトリック作家(一八八五—一九七〇)。

注7 ブリュッゲル…フランドルの画家(一五二五頃—一五六九)。寓意をまじえた独特の写実的な画風で知られる。

問一 文中の(あ)～(か)に入るもつとも適当な言葉を選択肢から一つずつ選びなさい。

(あ)

- a. 魅力
- b. 優しさ
- c. 同意
- d. 暴力